
迷い猫と深海の森

桜井 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い猫と深海の森

【Nコード】

N6757Q

【作者名】

桜井 心

【あらすじ】

四方を森に囲まれた屋敷、千二百年以上続く大名家。辿り着くには細い一本道を抜けるしかない。一步でも外れ、森に入ると生きては帰れない。

そこで暮らす私と父様。

母親を失ってバランスが崩れた父子のお話。

※必読に目を通してからご覧ください！

必読・注意書き

連載してる『悠闘記』のパロディ？作品です。

ものっそいネタバレ含みます。

本編のキャラが出ていますが全く関係ありません。完全なる妄想・パロディです。

二次創作だとも思っ頂ければ。。。。

これから『悠闘記』を読んでみようかと思っている方は読まないほうがいいかもです。

「どっちでもいい」

「悠闘記、途中まで読んだけど続きを読む気はない」

「これから読んでいくけど大丈夫、ネタバレ上等」

「とりあえずこれを読んでから決める」

上記の方だけ次話にお進みください。
よろしく願います。

一、

はつきり言って、うちの家族関係は最悪だ。

いつきは肩まで伸びた髪を後ろで一つに束ね、鏡に映る自分の顔を睨んだ。父親譲りの整った顔立ち、一見冷たそうな黒い猫目の瞳、どんなに口角を上げてても微笑んでいるとしか思われない唇。

清楚、美人、箱入り娘。

どうせなら、可愛い顔つきの母に似たかった。

＊ ＊ ＊

「おはようございます、いつき様」

居間に入るとたくさんの人たちが私に頭を下げた。老若男女、誰も彼もが中学生の小娘にへりくだる。その間を通り抜け、いつきは自分の席へ腰を下ろした。

低血圧で寝起きは悪いが、一度目が覚めればたいしたことはない。

「おはようございます、父様」
トウサマ

向かい側に座っている男に言うと、テーブルに肘をついて新聞を読んでいた父がゆっくりと視線を上げた。

「おはよう、いつき」

それだけの言葉を交わし、微笑んだのか口角を上げただけなのか

わからない表情をして再び新聞に目を戻す。

朝食時に新聞を読むのがサラリーマンの性と聞くが、そんなものとは無縁の……いや、逆に彼らに給料を与える立場にある父が、今新聞を読む意味はあるのだろうか。

続々と並べられる朝食を無言で片付け、いつきは学校へ向かった。

「いってらっしゃい、いつき」

「……いってきます」

挨拶というか常套句というか、ヘンゲンセキゴ片言隻語。父とは必要最低限の言葉しか交わさない仲だった。

＊ ＊ ＊

母が他界したのは三年前、私がまだ小学生のころ。交通事故、突然の死だった。

父はえらく取り乱し、血眼になって犯人を探した。詳細は教えてもらえなかったが、その後すぐに轢き逃げ犯は”消えた”そうだ。

もともと寡黙だった父は以前にまして喋らなくなり、母の明るさによって支えられていた私たち家族は崩壊した。

父が母をどれだけ愛していたかは、まだ幼かった私でも十分理解できた。感情を面に出さない父が、母の言葉となると微笑んだりはぶてたり。母はそんな父を見て「かわいい」とよく言っていた。

私だって、そんなお母さんが好きだった。

＊ ＊ ＊

屋敷に戻ると、分厚い資料の束を抱えた父と鉢合わせした。珍しい、眼鏡をかけている。

もうそんな日だっけ？

記憶を辿り、父が眼鏡をかけたのは確かに一ヶ月ほど前だと思いついた。

月に一度か二度、こうして父が眼鏡を掛ける日がある。高校生のとき失明し、その療養らしい。だけど眼鏡が視力の回復にどう繋がってるのか私にはわからなかったし、なぜ失明した人間に光が戻ったのかも、よくわからない。

「お帰り。いつき」

私を見るなり、父は眼鏡の奥にある瞳を微笑ませて言った。

「今日は、早かったな？」

あれ、機嫌いい？

どうしたのだろうと父の顔を見上げていると、廊下の向こうから白髪混じりの老婆が駆け寄ってきた。

「当主様、何なさってるんですか！」

「何って、仕事を纏めようかと……」

「そうではなく、なぜあなた様がこのような荷物を持っているのですか。他の家臣たちは？ ああ、もう。私が持ちます！」

「いやいや、何いってんの絹川さん。持たせるわけないでしょ？」

資料を奪い取ろうとする老婆を、父はさらりとかわした。

「年齢的にも、性別的にも俺の方が有利だろ？」

「そうではなく、ケジメの問題です！」

「ケジメ、ねえ」

父は困ったように笑い首を傾げたあと、ふと私の存在に気がつい

た。

「いつき、おいで？」

本当に、今日はどうしたのだろうか？

優しい笑みに近寄ると、父は私の腕にたくさん資料を乗つけた。

「と、当主様！？ いつき様にそのような……」

「一番上の資料がキャビネットA－2、赤い付箋が貼られているところからはC－5、黄色い付箋からがD－3、青が参考図書の棚3－3、最後の緑が同じく参考図書8－1。覚えた？」

付箋を指で弾きながら父が説明した。

細くて長い綺麗な指を追っていた視線を、今度は父の顔に向ける。

「一番上がA－2、赤い付箋からC－5、黄色がD－3、青は参考図書3－3、最後の緑、8－1」

復唱すると父は眼鏡越しに微笑み、「よろしく」と私の肩を叩いた。

意外に重い紙の束を持ち直して顔をあげると、何に驚いたのか老婆が目丸くして私を見ていた。

二

「いつきつて名前はね、お父さんの大切な人たちの名前からきてるんだよ」

洗濯物を畳みながら、母が嬉しそうに言った。

怒られても叱られても、この人たちは自分で何かをしたいみたいで、「三津野と」うち”は切り離そう。敷地内だけどそれは関係なく、三人で暮らそう？」父の理想は、普通の家族だったらいい。

父も母も、千二百年以上続く名家の生まれだとは思えなかった。

「父様の仕事はなに？」という質問に、二人とも首を捻って答えを出そうとした。

「何て説明すればいいんだろ。社長さんみたいなもの？」と母。

「それじゃ三津野が一つの会社みたいになるだろ。あー、でも。うん、そうかもな。社長？」父が言う。

答えは結局曖昧で、うちでいう『社長』当主』理論は理解できた。三津野の人間はみな、父のことを「当主様」と呼んでいた。

何をしているまではまわからないが、父が仕事をする姿は好きだった。

真剣に資料を眺め、しばらくすると思いついたように指示を与える。

昔、聞いたことがある。天才は全てを頭の中で片付けてしまうのだ、と。

センター試験の時、開始時間になっても紙を捲るだけで何も書こ

うとしない学生がいたという。筆記用具を忘れたのかと思ったが、鉛筆はきちんと机の上にある。

ダメだな、こいつは。問題がわからないんだろう。もしくは寝ているのか。

試験開始から三〇分、試験官がため息をついた時、突然学生が鉛筆を手にとった。机の左端に問題用紙を揃え、黙々とマークシートに記入していく。

なんだ、なんだ？ 当てずっぽうか、やけになったのか？

記入を終えた学生は今度はマークシートと睨めっこをし、試験終了の合図があるまでの五分間、机に伏せ居眠りをしていたという。のちにその試験官は学生と話をする機会を得、センター試験のことを尋ねてみた。その時に返ってきた返事が、

「頭の中で、全て片づきましたから」

いちいち紙に書かなくても、計算式やマークシートの番号は頭の中で整理できるでしょ？

仕事をする父を見るたび、天才と呼ばれた学生の話思い出した。

＊ ＊ ＊

眼鏡の日が終わった次の朝、父はいつもに戻っていた。

「おはようございます、父様」

「おはよ、いつき」

だから、なんだってこの人は朝食時に新聞を読むのだろうか？
夜は仕事でいなくせに。

三

母が亡くなってから、父の仕事量が増えた。仕事が忙しくなったのか、単に逃げてるだけなのか、以前より家族の会話は減った。

家族といっても私と父だけ。ただの親子。

いつてきますと玄関を開けた時、雨が降っていることに気がついた。

傘、持ってこなきゃ。

引き返そうとした時、

「あのさ、いつき」真っ白な傘が私の頭上を覆った。「俺に、敬語使わなくていいよ？」

父が、私に傘を差し出していた。

驚いて立ち竦んでいると、半ば無理やりに柄を握らされた。

「気をつけて」

それだけいうと、父は手をヒラヒラさせて居間のほうへと戻った。

「……わかん、ない」

寡黙で表情を出さない父親。母が死んでからは、私にさえ興味を示さなくなったように見えた。

父が――…

傘を握りしめ、三津野の屋敷をあとにした。

＊ ＊ ＊

天気予報は何と言っていただろう？

サラサラしたハニーブラウンの髪を肩まで垂らし、満面の笑みを浮かべるお天気キャスターが「今日は雲一つない晴れでしょう」と語っていた。

同級生たちが文句を言う中、いつきは白い傘を手を下足場へ歩いた。そこで他の人と同じく、面倒そうに空を見上げている佐伯サエキンキト鋪戸の姿があった。

「何してんの？」

「うわっ、いつき？ 傘なくて困ってんだよ」

「傘ないの？」

「当たり前だろ。朝はあんなに晴れて……お前、なんで傘持ってたの？」

鋪戸の視線が、私の持っている傘に行く。

「父様が。朝、雨降ってたから」

「ああ、三津野の森は天候が変わりやすいからな」

一緒に帰るかと尋ねると、鋪戸は私から傘を奪い「よろしく」と笑った。

「父さんがじーちゃん似だから、俺は母さん似なんだ」と訳の分からないことを言っていた鋪戸だが、私の目から見れば十分伯父さん似だと思う。

＊ ＊ ＊

佐伯宅までもうすぐというところで、ふいに鋪戸が話題を変えた。

「広さん元気？」

鋪戸は私の父を名前で呼ぶ。父親が親友同士、鋪戸の父が「広」と言う所以らしいが、娘の私としては微妙な気分だ。

「元気って？」

「いや、だから……叔母さん、亡くなってさ」

「なぜ鋪戸は父様のことは”広さん”と名前で呼ぶのに、お母さんのことは”叔母さん”と呼ぶのだろう」

「は？」

「何でもない。心の声。で、父様が元気かって？」

睨み付けた私の目が答えだった。鋪戸は「そっか」と呟き、下を向いた。

「いちおう、私も母親を失った可哀想な娘なんだけど？」

「ああ、うん。いつきは……いや、いつきより広さんのほうが危なかったから」

「逃げた犯人殺しちゃったしね」

「うん、確かに……殺したの？」

「嘘に決まってんじゃない。知らない」

冗談にならない私の言葉に困惑し、鋪戸は頭を掻いた。それ以上の会話をすることなく、帰り道を急ぐ。

三津野まで送るといふ鋪戸の言葉を、私は全力で拒否した。

「傘貸さないからね！」

「別にいいよ。三津野の森から歩いて帰るから！」

「そしたら一緒に帰った意味ないじゃん！」

道行く人たちが路上でいい争う中学生二人に怪訝な目を向ける。
買い物帰りのおばさんがこちらに近寄って来た時、鋪戸が折れてま
ずは佐伯の家に行くことになった。

「お前さ、広さんとちゃんと話しろよ」家に入る前、鋪戸が言った。
「今更だけどさ」

私は傘を差したまま、玄関にいる鋪戸を見上げる。

「何いってんの。寒い。さっさと家の中入って」

「愛されてる本人は気づかないかもだけど、広さんはちゃんと、い
つきを好きだよ？」

うまい言葉を探しているようだ。鋪戸は空を眺めたり、頭を掻い
たりしながら話をした。

「叔母さんのこと好き過ぎて変な感じになってたけど。もうそろそ
ろ、二人でやっていくべきだと思う」

「……支離滅裂。意味わかんない」

「ああ、だから、うん。広さんはいつきのこと、大好きだよ？」

それでもまだうまい言葉を探す、鋪戸に背を向けて傘の柄を握っ
た。

「ありがとな、いつき！」

勝手に話を切り上げた私に怒ることなく、鋪戸はそう叫んだ。

四、

神様がいるのなら、願いを叶えて欲しい。

一つだけ、どうしても望んでるものがあるんです。

お母さんが、死んだ日の朝に戻してください。

＊ ＊ ＊

「いつき！？ よかった、どこいったの？」

朝、家に戻ると母が玄関先で私を出迎え、ぎゅっと抱きしめた。初めての家出だった。父様と喧嘩になった原因は覚えていない。ただ、頭に血が上った私は感情に任せて家を飛び出した。昨晚のことだ。

私を抱きしめる母の身体は、冷えていたけど何故か温かく感じた。

「……父様は？」

尋ねると、母はよりいっそう私を強く抱いた。

「いつきを探しに行ってる。みんな心配してたんだからホント、よかった。おかえり、いつき」

「え？」

「帰ってきてくれて本当によかった。おかえり」

泣きそうな声で母が言った。私に気づいた屋敷の人たちが、続々と集まり安堵の声を漏らす。

「お母さん……」

母の首に手を回し、抱き返そうとした時、

「いつき!?!」

背中の方こうで、父様の声が聞こえた。振り返ると、息を切らせてこちらに歩み寄ってくる父の姿が見えた。

私はとっさに母を突き飛ばし、屋敷の中へ戻った。

「いつき!」

父様、お母さん、三津野の人たち、みんなが私の名前を呼ぶ。

机の上にあったランドセルを取り、いつきは再び屋敷を飛び出した。

「待て、いつき! どこ……学校行く、のか?」

怒鳴り声で叫んでいた父が拍子抜けた声を出した。その隙に、人々の合間を縫っていつきはさっき歩いた道を再び駆けた。

「待ってるからね、いつき。ちゃんと帰ってきてね!」

そう叫んだ母の言葉は嘘になった。

家に戻ってきた母は冷たく、身体はボロボロだったという。

あの日、「ただいま」と言えなかった。ううん、違う。そうじゃなくて。

ちゃんと話をすればよかった。

心配した母の腕を、私はいつも簡単に振り解いた。訴えかける言葉が無視して、逃げ出した。

逃げなかったら、今過ごしている未来は、ほんの少しでも変わっていただろうか？

六

屋敷へ戻る道の途中で、ふいに大きな風が吹いた。「あっ」と声を発すると同時、いつきの手から離れた傘が吹き飛んだ。

真っ白な傘が、泥にまみれる。

思っていたより雨が降っていたようだ。顔に当たる水滴が痛い。

「痛い……ふえっ……いた……ううう」

そう思ったらなんか、胸が苦しくなってきた。瞼が熱くなった。

「う、……ああ。お母さん、お母さん！」

泣きながら顔を上げると、三津野に続く一本道が妙に長く見えた。四方を森に囲まれている三津野の屋敷。たどり着くにはこの細道を抜けるしかない。一步でも道を外れたら、生きて帰ることはない。

「森にはクマがいるぞ。気をつけろ」

普通に「森で迷うな」と警告すればいいのに、父が意地悪をしてそう言った。珍しい冗談だった。母はそれをクスクス笑いながら聞いている。

三津野へ続く一本道、地獄への細道。

声も顔も服もぐしゃぐしゃだ。それでも雨に打たれ、泣き続けていると森の奥でガサツと葉の擦れる音がした。

風？ いや、それにしては音が大きかった。何かいる？

じっと目を凝らすと、森の奥に黒い影が見えた。黒茶色の瞳は、まっすぐにいつきを見つめている。黒い物体の正体はすぐにわかった。

クマだ！

「や、やだっ」

近づいてくる影に怯え後ずさると、細道から大きく外れてしまったことに気がついた。あ、まずい。と思った時には既に、いつきは帰り道を失っていた。

何これ。ちよっとしか外れてないのに、木々しか見えない。細道がない。きよろきよろと見渡すが道は見えず、どうやら本当に閉じこめられてしまったみたいだった。

父様やお母さんが言ってた通りだ、一步でも道を外れると帰って来れないぞ。そして

『森にはクマがいるぞ。気をつけろ』

あれは、父様の言葉は冗談じゃなかったんだ！

近づいてくる足音に、いつきはさらに後ずさった。

どうしよう、どうしよう。

逃げようにも足が動かない。立てない。

ドスッと音を立て、熊がいつきの前に立ちふさがった。大きく腕を振り上げる。

「いやだ……やだっ、助けて。……助けて、父さまっ！」

叫んでから、いつきは父に助けを求めていることに気がついた。今、こんな状況で自分を守ってくれるのは――…

「父様……父さま！」

恐ろしい鳴き声から逃れるよう耳を塞ぎ、振り下ろされる牙が見えないよう目を瞑った。ぎゅつと唇を噛み締めると、熊の呻き声とドサツという音が聞こえた。

……………え？

普通ならそんな音が聞こえるわけないし、本当なら今ごろ自分の身体は傷ついてる……この世にいなかったかもしれないのに。

そっと目を開け、いつきは小さな悲鳴を上げた。

足元に、熊が丸焦げになって倒れていたのだ。一瞬の出来事だったのか、熊はぴくりとも動かず死んでいる。降り続ける雨のせいか、熊を焼いたはずの炎も見えない。

「いや別に。殺す気は、なかったんだけど……」

倒れた熊の脇に立っていた男がため息混じりに呟いた。

「まだ、使えたんだな」

彼は寂しそうに手中にあるハートとスペードのトランプを眺めた。

「父、さま？」

いつきが見上げると広は軽く微笑み、腕を振るった。まるで手品のように、手元に傘が現れる。

「おかえり」

広は傘をさし、反対の手をいつきに差し出す。

「おかえり、いつき」

「――さま、父さま！」

いつきは立ち上がり、広の胸に飛び込んだ。

ごめんなさい、ごめんなさいと、何が悪いのかわからないがひたすら謝った。鼻水をシャツに擦り付けたところで父が私の頬をなで、

「ごめん、じゃない。こういう時はありがとうだよ？」と小さく笑った。

抱きしめる父の身体は雨に冷えて冷たかったけど、微かな温もりは消えていなかった。

「ただいま……、ただいま、父様」

七、

お風呂から出てすぐ、当主の間へ向かった。大きな三津野の屋敷、本棟から少し離れた場所、父様が昔使っていた場所だが、今はもう誰もいない。

「遅くなりました」

襖を開けると、父様は勉強机に座って空を眺めていた。私に気づくと立ち上がり、床にある座布団に座るよう促した。そっと腰を下ろすと、私と向かい合うように父様も座った。

「風邪ひいてない？」

私は首を振って、大丈夫と答える。そっかと父様が呟き、「今朝も言ったけど、敬語使わなくていいよ？」と諭すように優しく言った。

意図して使っているわけじゃない。何となく無意識に、敬語になってしまうのだ。

ああ、でも。父様にはそれが、”壁”だと感じてしまうのかな？

「昔ね、娘が二人いたんだ」

突然の告白に、うまく頭がついていかなかった。なに、娘がいた？

「高校生の頃にね。ああ、違う。血が繋がってるわけじゃなくて…あいつらが俺に父親を求めて、俺は本当の娘みたいに思ってた」

ようやく理解した。なんだ、そういうことか。紛らわしい言い方をしないで欲しい。

「依樹と、あかつきって言うんだ」

”い”じゅと、あか”つき”。父はわかりやすく、もう一度彼女らの名前を繰り返した。

「それとね、いつきって名前は漢字にするとこう書くんだけど」

父は机の上にあった紙を引っ張り出し、そこに『一樹』『依月』と書いた。ニパターンあるのか。

「依樹とあかつきは、こういう字」

続けて書いた。『依樹』『暁月』

「暁月は完全に当て字だけどね」ペンのキャップを締め、優しく微笑む。「依樹と、あかつき」

その二人はどうしたの？ 尋ねる手前で愚問だと気がついた。初耳、今ここにいないということはそのようなものだ。

「いつきが生まれた時、変な話だけどビックリしたんだ」
「ビックリ？」

「うん。本当に、娘が生まれたんだって。俺の娘だって。抱き上げる時すごく軽くて、小さくて……これが、”いつき”なんだって思った」

記憶を辿るように語ったあと、「嬉しかったんだよ」と微笑んだ。

「依樹はパパ様って言うてくれたし、あかつきは最後にお父さんって呼んでくれた。いつきはどうなんだろうって楽しみに待ってたら、父様だもんな」

クスクスと、口元に手を当てて微笑む。

いつきは首を傾げて考えたあと、小さく言葉を零した。

「お爺ちゃんが、父様だから」

「ん？」

「父様がお爺ちゃんのこと父様って呼んでたから、いつきの父様は、とうさま」

「……あー、そっか」

父は背筋を伸ばして納得したあと、もう一度嬉しそうに「そっか」と呟いた。

「おれ譲りなんだ？ 父様って言葉は」

「譲りっていうか……」

「お母さんはもう一人のお爺ちゃんのこと、”お父さん”って呼んでたでしょ？」

「……うん。じゃあ、父様譲りだ」

大きな手のひらが私の頭を撫でた。優しく触れるように、次第に強く髪を乱すように。「かわいいなあ、いつきは」の言葉とともに、手を離した。

「父子ってのは、どうも上手にバランスが取れないな」困った顔をしながら父が言う。「どこまで話していいか、わかんない」

ずるい、と思った。父様は、ずるい。

「父様が、いつき……話してくれなかったから」
「ん？」

「だって父様が、いつきと話してくれなかったから、だから……いつきも、父様と話せなかった」

「……………そっ、か」

黙って私の話を聞いていた父様が、くしゃっと前髪を書き上げた。
「そっか」

「ホント、不器用だよな」苦笑いをし、私のほうを向く。「言葉が足りないというか、自分の感情を表現するのが下手なんだ、たぶん」

父様は微笑んで、再び私の頬を撫でた。

「母さんにも、よく怒られてたよ」

「お母さん？」

「うん。広はもっと会話しないとダメだって。黙ってても、人は理解してくれないよって」

まるで今の俺だ、と笑った。

「うちはさ、お母さんがいたからこう……うまい具合に回ってたと思うんだ」

父は指で宙に円を描き、「こう、くるくる」と可愛い表現をした。

「だから俺も、安心して任せてた。二人が笑ってるのをずっと、見守っていききたいなって」

二人というのは言われずとも、お母さんと私のことだろう。
妻と娘、大切な家族。

「でもそろそろ、ちゃんと、二人でやっていかなきゃな？」

あれ、どこで聞いた言葉だろうか？

二人で……

「ごめんな、いつき」

父が私の涙を拭った。涙？

「……うん」

そうだ、私。涙を流している、泣いてる。

「うん、うんっ」

溢れる涙を堪えることなく、父に寄りかかった。
父様は腕を広げ、私を抱き締めた。

ぎゅっと、優しく、抱き締めた。

八、

＊ ＊ ＊

「……よしっ」

伸びた髪を二つに結び、鏡の前で頬を叩いた。一見冷たそうな黒い猫目の瞳、どんなに口角を上げてても微笑んでいるとしか思われな
い唇。「にー」と笑顔を作ると、微かに笑みが出来た。

「よしっ！」

もう一度頬を叩き、洗面台に背を向ける。

＊ ＊ ＊

居間に入ると、たくさんの人たちが私に頭を下げた。

「おはようございます、いつき様」

老若男女、三津野の人たち。いつきは何も言わず、彼らを通り抜けて自分の席へ腰を下ろした。周りの人々は怪訝そうにいつきを見送る。

顔を上げると、向かい側に座っている父の姿があった。相変わらず肘つき姿勢、新聞に夢中。

「おはようございます、父様」

いつきが言うと、広はゆっくり目線を上げた。

「ああ。おはよう、いつ……」

「朝食時に新聞を読む癖、やめて頂けませんか？」

はつきりとした声に、広はきよとんといつきを見つめた。

「父様は一般サラリーマンじゃないし、今読まなくてもいいでしょ？
夜ご飯と一緒に食べれない日が多いから、いつきは朝ご飯を食べながら、父様と話がしたいです」

呆然といつきを見ていた広だが、途中でククツと笑いを零した。
新聞を閉じて、いつきと向き合う。

「そうだね。うん、確かにそうだ。お話……今日は何を話そうか、いつき」

父様が手をあげて、家臣に「俺にも朝食もってきてくれるかな？」と頼んだ。「いつきと同じやつ。同じメニュー」
嬉しそうに、私の顔を見つめる。

「そうだ、学校はどう？ 鋪戸にいじめられたりしてない？」

それはもう嬉しそうに、微笑んだ。

久しぶりに見た、私が作った、私の言葉で出来た、父様の笑顔だった。

八、（後書き）

ありがとうございました。

よろしければ『悠闘記』も御覧ください。

感想や評価くださるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6757q/>

迷い猫と深海の森

2011年3月26日23時43分発行